

Y7-05

当院の成人アナフィラキシー診療事情

横浜市立みなと赤十字病院 アレルギーセンター¹⁾、
横浜市立みなと赤十字病院 救命救急センター²⁾

○中村 陽一¹⁾、遠藤 順治¹⁾、磯崎 淳¹⁾、古家 正¹⁾、
橋場 容子¹⁾、田ノ上雅彦¹⁾、菊池 信行¹⁾、兼松 直子¹⁾、
松本 晶子¹⁾、丸 京子¹⁾、藤枝由紀子¹⁾、村田 進¹⁾、
八木 啓一²⁾

アナフィラキシーとは、死に至ることのある重篤なアレルギー反応であり、数分から数時間で起こる皮膚あるいは粘膜症状に加えて、呼吸器症状、血圧低下による症状、持続する消化器症状のうちの少なくとも一つが合併する場合に疑う病態である。当院における成人アナフィラキシー284例中、皮膚・粘膜症状263例、呼吸器症状171例、循環器・ショック症状117例、消化器症状が112例にみられた。初診に至った経緯は、アナフィラキシー症状で緊急受診134例、原因アレルギーの精査目的で他院から紹介98例、自分でアナフィラキシーを疑っての受診が52例であった。初期治療で最も重要なのは、エピネフリン、酸素吸入、補液である。エピネフリンは気道閉塞や血圧低下を抑制することにより生命の危機的な状況を改善する。原因アレルギーは、284例中、食物151例、薬物42例、アニサキス21例、ハチなどの刺虫10例、その他6例、不明54例であった。ハチアレルギー症例が少ないのは、当院が山間部から離れて位置していることによるものと思われる。原因の過半数を占める食物アレルギーの詳細は、151例中、小麦44例、甲殻類18例、果物14例、ソバ8例、貝類8例、赤身魚8例、野菜5例、大豆4例、魚卵3例、その他11例であった。小麦によるアナフィラキシー44例のうち、運動誘発が疑われたのは26例であった。原因が特定できない場合やハチアレルギーのように完全除去が難しい場合は、エピベン自己注射の処方不可欠である。アナフィラキシーは小児のみならず成人においても重要な疾患であるが、成人領域においてはアレルギーの専門機関と専門医の数が不足している。

Y7-07

児童虐待の判断が困難であった慢性硬膜下血腫の3ヵ月児例

日本赤十字社和歌山医療センター 小児科

○濱畑 啓悟、高橋 俊恵、井庭 憲人、古宮 圭、
深尾 大輔、井上美保子、原 茂登、儘田 光和、
吉田 晃、百井 亨

症例は生後3ヵ月の男児。前日の午前0時ごろから嘔吐回数あり、午後から噴水様嘔吐、機嫌不良見られ顔色不良でぐったりしたため、入院当日午前0時頃緊急センターから紹介された。顔面蒼白で反応に乏しく大泉門著明に膨隆し、化膿性髄膜炎を疑った。CRP上昇なく、Na 130mEq/Lと低値。髄液検査で赤血球3+、細胞増多なし。入院後Na低値で痙攣が頻発したが、朝には電解質異常は改善し意識を回復した。頭部CTで慢性硬膜下血腫を認め、眼底検査では両側網膜に広範な網膜出血を認めた。児童虐待を疑い児童相談所(児相)に通告した。両親は若く、母はやや頼りないが子ども好きの優しい印象で、父も育児参加に積極的。両親の実家は近く育児援助を受けやすい環境で、経済的にも時間的にも余裕のある状態。児相は3回にわたって両親に児の扱いについて事情聴取したが、一貫して心当たりはないと主張し、児相職員も両親の態度からは虐待を疑うのが難しいと感じた。結局虐待が強く疑われるが、保護は見送られ見守りとなった。3ヶ月後右大腿骨骨折で再入院。退院時に警察立ち会いのもと児相が患児を保護した。警察の事情聴取に対して、父が虐待を自供し逮捕。現在も児は保護されている。児童虐待は外傷として救急部を受診するケースが多いが、意識していないと見逃されやすい。不自然な受傷状況や親の態度から虐待が疑われる場合は速やかに児相などに通告し連携をとる必要がある。当院では虐待対応マニュアルを作成し、虐待の発見に努めている。今回は両親の態度からは虐待の判断が非常に難しいと感じた事例であった。児童虐待を適切に発見し対応するためには、院内の連携とともに、院外の関係機関との日ごろからの連携が大切である。

Y7-06

伊勢赤十字病院救命救急センターにおける血液培養コンタミネーションの調査

伊勢赤十字病院 救急科

○中西 信人、水野 光規、森本真之介、青木 悦子、
谷口 忍、大西 和夫、説田 守道

【背景と目的】血液培養検査採血時のコンタミネーション(雑菌混入)は、不要な抗菌化学療法を増やし、医療経済の圧迫や新たな耐性菌の発生を招くおそれがある。本研究の目的は伊勢赤十字病院救命外来(以下当院ER)での血液培養時の採血手技、雑菌混入率を調査し、雑菌混入率を低減する方法を確立することにある。

【方法】2012年1月4日から2013年5月12日まで、当院ERで血液培養を2セット以上採取した140例につき雑菌混入率を調査した。雑菌混入の判断はコアグラウゼ陰性ブドウ球菌などの皮膚常在菌が血液培養1セットのみで検出された場合とした。また現在の初期研修医27人に血液培養採取時の手技について調査した。

【結果】当院救命外来での雑菌混入率は5.7%(8例/140例)であった。また研修医の27人中25人が両手に未滅菌手袋を装着し、穿刺部皮膚をアルコール綿で清拭後、ポビドンヨード消毒を2回行い、更に片手指先に消毒を行った後採血を行っていた。(指先消毒法)

【考察】一般的に血液培養時の雑菌混入率は3%未満が望ましい。全例滅菌手袋の使用により雑菌混入率の低減が得られたという報告がある一方、非滅菌手袋で可とする報告もある。採血から培養ボトルへ検体を入れるどの過程でも雑菌混入は起こり得るため、滅菌手袋を装着しても雑菌混入率をゼロにすることは困難であるが、一つずつ改善を試みる価値はあると考えられる。

【まとめ】当院ERでの血液培養施行時の指先消毒法は、雑菌混入の原因である可能性があり、今後前向き研究で雑菌混入率の低減が得られるか調査する予定である。

Y7-08

新病院開院後の当院救命センターにおける急性薬毒物中毒患者の傾向と地域特性

足利赤十字病院 救命救急センター

○吉田 直人、坂庭 弘晃、白田 武志、三田恵美子、
小川 理郎

【目的】当院に入院した急性薬毒物中毒患者(以下、中毒患者)の年齢、性別、使用薬物、最近の傾向、地域特性などについて検討した。

【対象と方法】2011年7月から2013年3月までに入院した中毒患者104例を対象とし、retrospectiveに考察した。

【結果】中毒患者は、総入室者数6,770名のうち104名(男52、女52)1.5%であった。受診年齢は16歳から85歳で、平均年齢は男性42歳、女性31歳であった。使用薬物は精神科処方薬50名(男13、女37)、アルコール33名(男28、女5)、農薬6名(男5、女1)、脱法ハーブ5名(男3、女2)、その他10名であった。死亡例は4例(農薬3、精神科処方薬1)、精神科通院歴のある患者は53例(男14、女39)中毒患者全体の51%に上った。

【考察と結語】当院は医療人口80万の両毛地域唯一の中核病院として第三次救急医療を実践している。精神科処方薬による中毒では女性性が7割を占め、10-20代女性よりも30-50代のうつ病女性による衝動的な過量服薬が多い。急性アルコール中毒では若年男性が多く、季節性がみられる。農薬では5例が高齢男性による自殺で3例が死亡した。一方、20-30代の脱法ハーブ吸引も5例(男3、女2)あった。当地域においても大都市型の中毒患者が増加傾向にある一方、パラコートや有機リン系の農薬を用いた自殺例も依然散見される。